

數年間篋底に藏した原稿に廣般な改訂を加へて公にされたものである。本篇は日支兩國の官公文書によつて明治十八年天津條約より明治二十七年日支開戦に至る迄の三國關係を考察するを主眼とする。特に注目すべき新説があるわけではないが朝鮮を中心とする外交上の重要期について和漢洋の史料を基礎として相當詳しい著述の出た事は注目に價する。(京城帝國大學發行、非賣品)

● 咸鏡南道及び黃海道の方言

小倉 進平著

本書は去る四月京城帝國大學法文學部研究調査冊子第二輯として發行され囊に印行された「咸鏡南道方言」及び「平安南道方言」を合せ見るべきものである。著者が前年度に引續き昭和四年兩道の殆んど全部に亙つて調査した結果の發表で兩道方言の特質を音韻、語法、語彙の三方面から觀察して其分布の状態を明にしたのみならず中間に介在する此地方の方言が既に調査し得た江原道咸北平安南道のそれに對して如何なる關係に立つかを

論じ黃海道方言と咸鏡南道方言の間には著しい逕庭があり咸鏡南道方言は更に南部と北部に於て大なる相違があり南部は黃海道のそれに近く咸南特有の方言は咸北南部及び平安北道厚昌地方迄伸張して居ると結んで居る(京城帝國大學)。(以上今石)

● 西洋中世史の研究

文學博士 植村清之助著

坂口博士は、ランケ史學を深く體得して、吾が國の史學に古典的な重さを加へられたが、他面に於いて植村博士は、西歐の傳統的史學に對する一流の批判を以つて、日本に於ける西洋史研究の爲に独自の生面をオリエンテレンして居られた如く想はれる。本書は斯かる想定の謬らざる事を示して居る。

採録せる七論篇の中、六篇は既に専門誌上に價值を問はれたものである故に、卷頭的一篇「中世初期に於ける國家的社會的變遷の研究」を紹介する。京都帝國大學に學位論文として提出せられた本篇は Roman 及び Barbarian の對立を中心として觀たる古代中世轉換期の歴史的考察

として、中世史の中心事實なるローマ風ゲルマニ風社會の成立に對する、現代中世史學の最も高き水準に立つ基礎的研究である。

Völkerveränderung を一つの破壊運動として取扱ふことは、中世史の理解に對して甚だしい誤謬を齎らした。現在の中世史研究は、その初期に關して最も多くの問題を持つて居る。特に Spätantike 及び Frühmittelalter の間に介する諸問題の討究は著しい活氣を示して居るのである。

彼の塊國史家 Alphonse Dopsch は、カロリング朝研究より溯つて此の方面に研究を進め、最も啓蒙的な態度を保持して、多くのエビゴーン論敵を擁し主として經濟史的見地より、古代中世の直線的繼續を主張し、所謂の Kataklyphen-theorie 及び Kulturismus (古代文化停頓説) の舊見解に對して勇敢なる論鋒を向けて居る。種々の點より Dopsch の學風に接近して居られた植村博士の本論文を、彼れの Grundlage der europäischen Kulturentwicklung を比較するのは、本篇を評價する一つの方法であらう。

第一に本篇はその構成に於いて、Dopsch に比して極め

て明確なる理論的根據を示して居る。即ち考察の範圍として、古代中世の轉換期を五世紀初、六世紀末の間と限定せる一事は、シーザー及びタキツス時代より、八世紀までを範圍に入れる Dopsch に對して、著しく吾人の注意を喚起する。五世紀初に出發點を索めたのは、蓋し Gothen の契約によつて生じたる、帝國と蠻族との關係の變化に重きを置いた結果であらう。斯様な見方は、民族移動史家の現代に於ける權威 Rudolf Schmidt によつても力強く代表せられて居る。(Schmidt: Allgeweine Geschichte der Germanen)

第二に、Dopsch の考察する地理的範圍は、主としてライン・ドナウの邊疆地方即ちリメス地方が重きをなして居るが、本篇はビザンツ・ブリタニアを除く全羅馬州域に互つて居る。

第三に、Dopsch の考察は専ら經濟史的見地に立脚し、教會史上の問題をも是を經濟的に取扱はんとする傾きがある。然るに本篇は、三方面よりの考察によつて成り立つて居る。即ち第一篇は民族移動期に對する政治的考察

であり、第二篇は經濟史的法制史的研究、第三篇は精神的宗教的考察に他ならぬ。右によつて本篇の形の上に於ける完整を認識することが出来る。次に、

第四、前にも述べた如くDopschはその態度稍々啓蒙的に馳せたるのみならず、主張するに餘りに急に於て時に矯激なる議論に馳せて論敵に當り、却て問題を紛糾せしむる嫌ひがないではない。吾が植村博士が、西歐學界の喧噪より遠ざかり能く西歐史家の弊害を脱して錯湊せる多數の問題を適當なる歸着點に於いて整理した眞摯なる態度は吾人の深く推服すべきところである。是れ固より博士の重厚なる史風を精倒なる批判の然らしむるところであらうけれども、博士が堪能なる羅句語の智識を以つて、根本史料の探索に克明な努力を惜まれざりしに俟つ事が亦尠くない。本篇は實に Monumenta Germaniae Historicaを利用したる日本最初の論篇なるのみならず、その探索の範圍の廣さに於いて西歐一流の著述に比し毫も遜色を認めない。

第五、Dopschがその議論の基礎をせる材料は主として

ゲルマニア考古學研究の結果を、カロリング朝時代研究に於いて最も鮮やかにその手腕を發揮した文書の利用である。一般にDopschは、新材料によつて立論する。然るに植村博士は全く傳來の Schriftstellerを史料として居る。日本に於ける研究の不便より恐らく止むを得ずして採つた此の方法は、幾多の新しき光明を本篇に與へて居ることを注意しなければならぬ。殊に第三篇の如きSalvianus, Venantius Fortunatus, Sidonius Apollinarisを史料とする癖新にして獨自なる研究である。此の時代の精神生活に對して最も深き理解を示して居る彼の教會史の權威 Albert Hamackは、同一の史料を用ふる乍ら、全然異りたる論程を結んで居るのである。

最後に本篇に比類なき獨自性を賦與するものは、全篇を貫く原則、即ちRomani, Barbariの對立に觀點を置く終始一貫せる著者の立場である。著者は「Dahaより Schmidtに至る Volkwanderungの諸大家が、孰れも種族による區別を以つて標準となせるを根據薄弱なりとし、Romani, Barbariの對立に於いて民族移動史を説かんとする、最も

合理的にして大膽なる原則に終始して居るのである。而も是れは博士の中世史に對する見解より生ずる必然の歸結に他ならない。

文藝復興期に於ける北方嫌惡及び十八世紀に於ける中世否定の傾向より由來する謬見を打破して、中世をば特殊なる生活、ゴシック文化として認識する傾向に對して中世を古代近代に隔絶せる別殊なる生活と見ずして、古代要素と新しき生活要素との混交する生成のプロセス其物とするに、より歴史的なる見地に立脚する見方がある。植村博士は常に後者の見方を有力に代表して居られた。中世史の中心事實はローマ風ゲルマン風社會の成立である。此の社會の成立は交互的である。一面に於いてはゲルマンのローマ化であり他面に於いてローマ社會のゲルマン化である。此の信條こそ正しく本篇に潜むライトモチーフであつて、本篇をして右の如き形式を採らしめた所以である。此の一見大膽なる試みは、今後の中世史研究に、尠からぬ刺戟と光明とを與へるであらうと信ずるのである。

要するに本篇は古代中世轉換期に横はる諸種の錯綜せる問題を能く整理して其の間自ら著者獨自の見解を示せるのみならず、第一篇の第三章四章、第二篇の第三章及び第三篇は大體に於いて西歐史壇に充分評價さるべき新研究に屬して居る。正に坂口博士の「希臘文明の潮流」と相並んで吾が西洋史壇に永く輝くべき珠玉であらう。論評するよりも、較る據つて學ぶべきスタンダードとすべきである。(菊判四〇〇頁、價、三八〇、星野書店)〔鈴木〕

●西洋史講座

雄山開發行

會て日本史、東洋史の講座を出した雄山閣書店では、今度その姉妹講座として西洋史講座を發行した。瀬川、大類兩博士監修の下になるもので未だ數冊を出したにすぎないが、それによつて見ても執筆者に新進の人、多數を加へ、編纂法にも特別の注意が拂はれて居るのを見る。主要部分は「古代東方諸國史」に始まり「現代史」に至る時代史であり、その他、外交、思想、宗教から音楽、建築、美術等の特殊方面をも加へて、夫々分擔諸氏が得意